

《特別企画：フィールドワーク》

フィールドワークの知／反フィールドワークの知

周藤 真也

【要約】

理論と調査の対立的地平はいかにして無効化されうるか。本論文では、いわゆる「フィールドワーク」そのものの中に見出される、それ自体に対する否定の要素（これを「反フィールドワークの知」と呼ぶ）にその可能性を見出す。「反フィールドワークの知」は、この世界（に生きることそのもの）がフィールドワークという値をもつことを発端としている。このことは、思惟する学問としての哲学の特質を社会学が持ち合わせていることを意味するとともに、「フィールドワークの自我論的転回」は、〈私〉の経験する世界の記述が社会学になり得る可能性を示している。この論型は、世界を生きる人びとの方法を観察するのはあくまでも研究者であるという構成をとる従来のエスノメソドロロジーに対して、別様の「人びとの社会学」の可能性を指し示すことになる。こうして社会学は、社会調査とともに社会という対象から解放されることを通して、社会科学となる途が拓かれる。

キーワード： 理論, 社会調査, フィールドワーク, 社会科学

1. はじめに

理論と調査の対立的地平はどのようにして無効化されうるか。

1990年代後半から2000年代前半にかけて、日本の社会学において、社会調査に関する議論が活発化した。その背景には、社会調査に関する教育体制の整備と、社会調査を担う専門的人材の育成を目的として、日本社会学会を中心に社会調査に関する資格制度の整備が検討されていたことがあった⁽¹⁾。社会学関連の学会では、社会調査に関わるシンポジウムが相次いで開催され、社会学関連の雑誌でも、社会調査に関する特集が相次いで組まれた⁽²⁾。

これら社会学関連の学会・雑誌におけるシンポジウム・特集の趣旨、目的はさまざまであるが、現状の社会調査の問題点や、社会調査教育の課題などをまとめたものがある一方で、社会調査に対する知識社会学的な研究の試みも見出された。

社会調査に対する知識社会学的な研究において焦点となったことのひとつがいわゆる「質的調査」、あるいは量的調査／質的調査の対立的な地平に関する議論である⁽³⁾。佐藤健二の一連の仕事〔佐藤, 2003〕は、この対立的地平がどのように構築されてきたのかを検討することを通して、この対立的地平の無効化を試みた。そこでは、質問紙調査を中心として統計的な手法を用いる「量的調査」に対して、「質的調査」という語は「空のカテゴリー」（残余カテゴリー）として生み出されてきており、「量的調査」に属するとはみなされない様々な方法論が、「質的調査」に属するとみなされているとする⁽⁴⁾。したがって、「量

的調査」とされるそれぞれの調査法を、「質的調査」と並列的に置くことによって、この対立的地平は無効化できるというのである。

井出 [2003] は、佐藤の議論をさらに一歩進め、戦後の社会調査論が、質的／量的の二類型によって構成されてきた過程は、「質的調査」の価値が貶められる過程であったことを確認する。そして、「現在経験しつつある質的調査法の復権」[井出, 2003:90]において、社会調査の知識社会学的研究の重要性を説く。その背景には、1990年代以降の10年足らずの間に生じてきていた質的調査法の復権に対して、社会調査の資格制度は、従来型の質的／量的の二分法の中で「量的調査」に重点のひとつを置いた構成を取っており、これに逆行しているように見えることが考えられるだろう。これには、教育内容や教育法の標準化が進行している「量的調査」に対して、「質的調査」はまちまちであるということがあるが⁽⁵⁾、最近になって(ようやく)質的調査に関する本が立て続けに出版されていることは、「質的調査」の教育の立ち後れを補うものであるとともに、その結果として生ずる質的／量的の二分法の固定化に寄与する「質的調査」の教育の標準化において、知識社会学的にもまた新たな対象とすべき課題となっているところだろう。

ともあれ、本論文において注目したいのは、質的調査の復権にともなって生じてきた、フィールドワーク(現地調査)の特権化である。佐藤によれば、この特権化は、調査実践と理論的実践の分割を引き起こし、この分割は、調査実践の文脈の中では、1次データと2次データとの差異として現れるという。そしてそこでは往々にして、2次データに対して、現地で収集したデータの方が根源的であるという考え方が述べられることになるというのである。

しかしながら、本論文においてより注目したいのは、このフィールドワークの特権化は、「質的調査」の文脈においてだけではなく、「量的調査」の実践においても行われるということである[佐藤, 2003:21]。例えば、「量的調査」を中心とした社会調査法のテキストにおける次のような記述は、「フィールドワーク」が直接的なフィールドワークのすすめという形で、いわゆる「質的調査法」として言及されるだけでなく、「ナマのデータ」を収集するという意味において、いわゆる「量的調査法」の中でも強調されることがあるという事例になっている。

「フィールドワーク」という言葉は、もともとはなにか特定の調査の方法をさすものではなく、なんらかの意味で「現場」に出かけて資料やデータを収集することを意味しており、統計的なものから参与観察まで幅広い方法が含まれている。最近、これを非統計的なものに狭く限定して考える人もいるが、それは間違いであって、統計的調査でもデータ収集の現場は「フィールドワーク」であることを忘れてはならない。[盛山, 2004:11]

本論文の主題は、「フィールドワーク」が強調されるとき、それによってどのようなものが生じ、また、それによって調査と理論との対立的地平が生じているならば、どのようにして無効化されるのか、ということである。本論文は、このことを「フィールドワーク」がもつある種の「過剰さ」焦点を当てることを通して、対象化していくことを試みたい。

2. フィールドワークという「暴力」

いかなる実践も政治的なものである以上、社会調査もまた政治的な実践である。

さまざまな社会調査は、それらが社会学の方法であるならば、その実践は、社会学が対象とすべき社会事象をフィールドワークによって実定化してきたということもできるだろう。例えば、シカゴ学派は、社会学史上、しばしばアメリカ合衆国における社会学という知の成立と重ね合わせて語られてきたが、むしろそこでは、シカゴ大学社会学部やアメリカ社会学会の設立といった学問の制度が、社会学という学問と社会学の対象を必要とし、シカゴという都市を「社会的実験室」と見立てて、社会学の対象と社会学という学問そのものを実定化していった過程として置き直すことができることが予想される⁽⁶⁾。このように、フィールドワークや社会調査の実践が、社会学の対象や社会学という学問を実定化してきたとするならば、そこにおいては社会学者もまた「リアリティの政治」を行っているのであり、本源的に「暴力性」を伴っているものとして位置づけることができるのだ。

こうしたフィールドワークのもつ「暴力性」は、しばしば、社会学者による調査対象への介入（のもつ暴力性）として語られてきた。社会学者も、フィールドにおいては、対象（者の生活世界）に参加し、対象者たちと相互行為をする。そうした意味において、社会学者は、フィールドにおいて、「透明人間」たりえない。調査者はフィールドにおいて、何らかの意図をもって対象（者の生活世界）に参加するわけであって、調査者がフィールドにおいて、対象者（被調査者）に対して恣意的に振る舞うとすれば、対象者に対する暴力となりうる可能性が存在している。だから、フィールドワークを行う際には、何を目的として、何を調査するのかを明らかにし、調査の成果については、フィールド（調査対象者）に還元することが調査倫理として求められたりする⁽⁷⁾。

しかしながら、より重要なことは、こうしたことがらというのが、わたしたちが社会学者である以前から生ずる問題であるということだ⁽⁸⁾。すなわち、わたしたちが他者たちの世界の中に入るときに、「この私」がその世界におけるひとつの要素として、その世界に対して何らかの影響を与えることは不可避なことがらである。そしてこのことは、その世界において、わたしたちが「行為をする」ことにおいて、より鮮明なものとなる。ここでいう「行為」とは、もちろん、わたしたちが何らかの意図をもって他者たちの住まう世界に対して働きかけを行うものである。つまり、他者たちの世界に入るとは、存在論的に暴力であるとともに、「行為をする」ことによってその暴力性は増幅される。

こうしたあり方は、調査者が、調査対象者の世界の中で「異物」として排除・消去される可能性をもつことを意味しており、フィールドにおける調査者に対する、一種の「暴力」ともなりうる。そして、調査者が、フィールドにおける対象者に対する「暴力」に自覚的になるとき、この「暴力」は増幅して実効することがある。フィールドワークが、調査対象への介入によって暴力性をもつ可能性に行き当たるとき、その「暴力」はフィールドに反射して、調査者自身を襲う。フィールドワークという「暴力」は、フィールドワーカー自身に対して注がれうるのである⁽⁹⁾。

こうしたことがらは、フィールドワーカーのアイデンティティの危機として対象化されるだろう。この危機において、フィールドワーカーには、次のような疑念が襲うことになる。なぜ自分はフィールドワークをしなければならないのか、なぜ今自分はここ（フィールド）にいるのか、あるいは、自分はフィールドにおいて何をすればよいのか、と。さら

に、こうした危機は、そのフィールドワーカーをしてそのフィールドから立ち去りたいという衝動に駆られることにも繋がっていくし、論文やエスノグラフィーなどの形で調査報告を書くことに対して阻害する要因にもなっていく。

しかしながら、こうした問題については、社会学においては、それほど語られてはこなかった。調査対象者との関係性の問題は、社会学においては、もっぱらラポール (rapport) の問題として語られてきた。すなわち、対象者との良好な関係を維持するとともに、過度な対象者への同一化は、調査の客観性を阻害する要素として避けるべきであると教育される。「ラポール」という思想の下では、フィールドワーカーは対象者の意味世界に参加しつつも、「合意」の上での相互行為であることによって、対象者の意味世界を改変しつつあることは正当化され、そこで起きていることを観察して記述することについては、それほどの疑念はもたれない⁽⁴⁰⁾。

調査者＝観察者のアイデンティティの危機に言及されてきたのは、社会学よりもむしろ文化人類学や精神分析においてである。文化人類学は、「未開社会」の観察の中から、その社会の特質を記述してきたのであるのだが、その営為は、文明人／未開人という二項図式と、自らを文明人の観察者としておくことを通して可能となっていた。しかしながら、植民地支配の終焉や、全地球上を覆う交通網・情報網の発達、旧植民地出身の人類学者の登場は、それまで人類学が異文化に対して向けてきた特権的なまなざしや、エスノグラフィー (民族誌) の記述において行ってきた文化の本質化・実体化を、根本的な疑念に付することになる。その結果、文化人類学においては、1970年代から自己反省の試みが生じてきており、「実験的民族誌」と呼ばれるジャンルを作り出すことになった。人類学者自身の経験世界を記述する「自伝モード」、現地人との共同作業によって記述する「対話モード」、フィールドの現場で聞こえるあらゆる声を平等に記述する「多声モード」などが、実験的民族誌における注目される試みとしてまとめられる [松田, 1996:26]⁽⁴¹⁾。そうした自己反省の中でも最も先鋭的なグループは、自己解体へと向かう。彼らからすれば、「実験的民族誌」ですら中途半端なものであって、異文化という対象を表象すること自体が問題であるとするのだ。

一方、精神分析が発見したのは、精神療法の場面における対象者との関係性において、治療者が患者に投影同一化してしまい、特権的なまなざしで対象を観察しえなくなる場面の存在である。精神分析は、これを「転移」という概念において対象化した。この転移は、対象者が、精神療法家に対して起こす「転移」に対して、「逆転移」と呼ばれてきた。サールズは逆転移現象を単なる治療者の心理的葛藤にとどまらない精神分析医に必然的な罪責感と定義する [Searls, 1979=1991(1):14]。あるいは、逆転移は、治療者の「私」の危機ともなりうる事が主張される [藤山, 1997]。

精神分析では、分析者は実体化することなく、不可視の存在に留まることによって、治療＝観察行為の客観性を保証してきた。このことは、しばしば実際に、分析者は患者にとって見えない位置におくことによって、治療を効果的に行う工夫がなされてきた。このように、観察者が対象者とのかかわりにおいて十全と観察することが可能であるためには、何らかの観察者の特権性を維持するための何らかの仕掛けが必要である。フィールドワークもまた、フィールドワークがうまくいく (成果がスムーズに論文やエスノグラフィーとしてまとめられる) とき、そこにはそれを可能にした制度や構造が存在するということだ。

たとえば、それは、学問という制度であったり、専門家という社会的な地位であったり、専門家による学問的営為によって行われるフィールドワークを受け入れるような社会構造ということになるだろう。そうした意味においては、フィールドワークを行う社会学者もまた、社会的な関係性から自由ではなく、そうした限定された中でフィールドワークを行わざるを得ない。フィールドワークによって書かれた論文は、そのフィールドワーカーが書いたというよりも、対象となったフィールド（社会）がその論文を書かせたというべきなのかもしれない。

しかしながら、すべてのフィールドワークがうまくいくとは限らない。対象者から観察されることに対して、拒否や抵抗を受けることがあることは容易に想像できる。こうした対象者とのかかわりにおいて、自らが特権的に対象者を観察するのではなく、対等な相互行為者であることが知らしめられるとき、フィールドワークという「暴力」は、調査者自らを襲うことがあるだろう⁽¹²⁾。そのとき、いかにしてなお、フィールドワークは可能であるのか。

うまくいかなかった、あるいは失敗したフィールドワークは、通常は語られない。なぜなら、それは単純に、フィールドワーカーが研究成果として、たとえば調査報告であるとか論文であるとか、エスノグラフィーといった形で研究成果をあげることができないものとなっていくからだ⁽¹³⁾。ヴィトゲンシュタインが言ったように「語り得ぬものについては、沈黙しなければならない」[Wittgenstein, 1922=1975:命題 7]。しかしながら、語られないものは、果たして存在してはいないのか。

現在の学問的水準でいえば、文化人類学は自己解体への道を経過して、エスノグラフィー的な記述の可能性を追求するものに転化している。しかしながら、本論文が注目したいのは、あくまでもこうしたフィールドワークに加えられる否定、フィールドワークのもっている根源的な不可能性である。フィールドワークが対象の意味世界を観察し、対象者の意味世界を十全と理解しようとするれば、精神分析のいう「(逆) 転移」の問題は自ずと生じてくるだろう。そのときに、対象世界を記述しないという選択、フィールドワークを放棄してしまうような選択は、いかにして正当化されるのか。

しばしば、発せられる「フィールドに出よ」というメッセージ⁽¹⁴⁾は、対象について十全とした観察を求めるといふ意味では単純すぎるし、観察者問題への配慮のなさといふ意味においても単純すぎる。もちろん、このメッセージは、「駆け出し」の研究者に対して、フィールドでさまざまな経験を積むことによって、成長することを期待してのものであったりするのだが、そこで焦点となっているのは、こうした語られないことであることに注意しなければならない。そうした意味において、まさに焦点は、こうしたフィールドワークに加えられる「否定的なもの」であるのだ。

3. 「自我論的転回」とフィールドワークの「過剰さ」

フィールドワークに加えられる「否定的なもの」は、いかに記述されるのか。フィールドワークについての省察が、文化人類学や精神分析に比べて遅れている社会学において、このことを主題とするのには若干の困難を感じないでもない。しかしながら、そうした中で、近年の日本の社会学において好井裕明を中心とするフィールドワークに関する社会学の一連の著作 [好井・桜井 編, 2000] [好井・山田 編, 2002] [好井・三浦 編, 2004] は、

注目に値する。これらの書物、特に『社会学的フィールドワーク』[好井・三浦 編, 2004]に収録されている論文には、次のような顕著な特徴がある。すなわち、そこで記述されているのは、フィールドにおける対象についての素朴な記述ではなく、フィールドにおける「この私」(観察者)の経験についての記述であるということだ。

これらの書物の共通の編者である好井は、『社会学的フィールドワーク』の序文の中で、次のようにこの書物を位置づけている。

社会学がフィールドワークをおこなっていくとき、どのような経験があり、実践があり、それらが“調べる”という調査者自身の営みにどのように反省的に影響を与えているのか。その影響が翻って、個々の調査実践や知見にどのように反映されていくのか。[好井・三浦 編, 2004:viii]

好井は、フィールドワークを行う調査者が「現場」と出会う実感を「“調べる”ことへの拒否あるいは抵抗といった『現場』からのちからと出会う瞬間」[好井・三浦 編, 2004:xi]に求めている。「わたしたちは“調べる”という営みのなかで、そうした抵抗とどのように出会い、どのように対応し、“調べる”ことを深化させていくことができるのか」[好井・三浦 編, 2004:xiv]がそこでは主題となっているのである。

このような試みは、次のような経験研究における「経験とは何か」をめぐる位相の変容として考えることができる。すなわち、これまでの社会学における素朴な理解においては、フィールドに入ることが、経験的な研究(経験研究)を行うこととされてきた。しかしながら、ここで実施されていることは、単にフィールドに入るだけではなく、フィールドにおける調査者の「私」の経験を記述するということである。そこでは、単にフィールドに入って、フィールドに基づいて研究を行うだけでは経験研究にはなり得ず、フィールドにおける経験を記述することによってはじめて、経験研究になるということが含意されている。では、誰の経験であるのか?—それは、もちろんフィールドに入った調査者である「私」の経験である。

こうしたあり方は、一般化して言えば、経験研究が、フィールドにおける〈私〉の経験の記述に転化したということになる。そこでは、フィールドについての素朴な記述は、もはや確実なものではない。フィールドにおける「拒否」や「抵抗」といった「否定的なもの」は、まさにフィールドにおける〈私〉の存在を指し示すことになるのだ。

しかしながら、この転換は、次のような認識論上の転換である。すなわち、こうしたフィールドワークの記述というものは、フィールドにおける〈私〉の経験を素朴に記述するだけでなく、経験というものがまさに〈私〉によって可能になっているという認識論上の転換を伴っていると見ることができるだろう。より強い言い方をすれば、フィールドにおける経験の確実性を保証するものとして、経験する〈私〉の存在に行き着いたとも言えるものであるのだ。

本論文では、この転換のことを、社会学におけるフィールドワーク思想の新たな展開と位置づけ、「フィールドワークの自我論的転回」と呼ぶことにしたい⁽¹⁵⁾。さらに、この「転回」は次のような要素を含み込むかもしれない。すなわち、この「転回」において切り拓かれているのは、〈私〉の経験に先在してフィールドがあるのではなく、〈私〉の経験する

この世界が、フィールドであるという認識である。〈私〉の経験する世界についての思惟は、伝統的には社会学の仕事であるというよりも、哲学の営為である。「フィールドワークの自我論的転回」において、フィールド＝世界において経験し、思惟したことが、記述のもとになる。つまり、この「転回」が達成しているのは、社会学の哲学への回帰、あるいは哲学としての社会学の可能性ではないのか。

ともあれ、こうしたフィールドワークについての認識論上の転換は、フィールドワークにもとづいた研究の評価において、次のような帰結をもたす可能性がある。すなわち、優れたフィールドワークというものは、それがフィールドワークの成果としてあるからではなく、フィールドにおける彼／彼女の経験にもとづいて書かれているからである。この「転回」においては、まさにこのフィールドにおける経験ということが問題となる。すなわち、より重要なことは、そのことに自覚的に、記述していると見なされるか否かなのだ。フィールドにおける経験に基づいた記述は、フィールドワークの成果としては、別に意識することなく達成されるころのものであるのだが、この「転回」においては意識することによって達成されるもの、言い換えれば、経験に基づいた記述というよりも、経験そのものの記述に切り込んでいくのである。

経験に基づいた記述から経験そのものの記述へ——この「転回」は、フィールドワークをめぐる再帰的 (reflexive) な社会学の再構成であるとともに、経験というものにかかわる次のような置き換えになっている。つまり、そこで記述されるのは、もはや対象者の意味世界ではなく、〈私〉の意味世界についての記述であって、記述される経験世界は、対象者のものから〈私〉のものへと置き換わっているのだ。

このような「転回」を前提とすれば、次のようなことがいえるだろう。こんにちもはや、フィールドワークをするという事は、それがフィールドワークであることを「否定」し「消去」するようなあり方と共にあることによって、はじめてフィールドワークたりうるということであるのだ。それは、ひとつには、フィールドワークのもつ「暴力性」、フィールドワークがもつ、対象者の意味世界への介入が、対象者からの「拒否」や「抵抗」を生みだし、それによって反射してフィールドワーカーの存在意義が問われるということであった。そして、もうひとつ筆者が目にしたことは、フィールドに対する〈私〉の経験の先在性において、「フィールドワークをすること」それ以前に、〈私〉の〈生〉そのものがフィールドワークとしての値をもつことであった。筆者は、これらをまとめて「反フィールドワークの知」と呼ぶこととしたい。

フィールドワークを否定するような〈知〉は、「非フィールドワーク (=フィールドワークではないもの) の知」ではない。なぜなら、「非フィールドワークの知」では、単にフィールドワークを否定するだけで、肯定へと回帰することができないからである。「反フィールドワークの知」は、まさにそれがアンチ (anti) であるからこそ、否定する当のところのものを肯定することができる〈知〉でもある。こうしたあり方を含めて、フィールドワークを考えると、「フィールドワークの知」は「反フィールドワークの知」を含みこむ。

フィールドワークは、それがフィールドワークを否定する形式をもつことによってはじめて可能になる。「これはフィールドワークではない」と。だが、さしあたって、これはフィールドに没頭したり、観察者がフィールドにおいて「透明人間」になったり (なっていると信じていたり) することによっても達成可能である。なぜなら、そこではフィールド

ワークを行っているのではなく、単にその世界において生きているのであって、「フィールドワークを行っていない」という値をもつことが可能であるからだ。だが、それに対して、「フィールドワークの自我論的転回」においては、「反フィールドワークの知」は、「過剰なもの」として立ち現れてくるだろう。素朴なフィールドワークに基づいた記述ではなく、まさに焦点がフィールドワークの経験そのものであること、そしてその経験は対象者たちの意味世界のものではなく、調査者であるこの「私」の経験であることによって、この「過剰さ」は生み出されていき、この「過剰さ」がフィールドワークに対する「否定」を生み出していく。フィールドワークにおける〈私〉の経験の記述が、フィールドワークの成果になること——これは、素朴なフィールドワークに基づいた記述に対する強烈なアンチテーゼとして「過剰なもの」を含み込むとともに、〈私〉の経験の記述は、それがフィールドワークであることも否定していく。つまり、われわれの〈生〉をフィールドワークに比定するとき、われわれすべては、はじめからフィールドワークをしているわけであって、フィールドワークをするということは、私たちの〈生〉のフィールドワークに対して「過剰なもの」になってしまうのであるのだ。

4. 〈私〉の経験する世界の記述と社会学の可能性

前節で確認した「フィールドワークの自我論的転回」は、〈私〉の経験する世界についての記述が、社会学の仕事になりうる可能性を指し示していた。ここでいう〈私〉とは、観察者であるそれぞれの「私」を一般化したものである。では、〈私〉の経験する世界についての記述は、すべて社会学になるのだろうか。とりあえず、記述するのは、社会学的な記述を志すという意味において「社会学者」ということに限定しておくとしても、フィールドにおける経験の記述すべてが、無条件に即、社会学であるということにはならないだろう。なぜならば、フィールドにおける経験の記述が社会学になるのは、彼／彼女が「社会学者」であるからではなく、社会学的な記述、言い換えれば、社会学的な形式に則って記述がされているかどうかであるからだ。では、社会学的な記述とは何か？——それは、明示的には描かれていないけれども、少なくとも、フィールドにおいて対象の真理を突いた記述であること求められるだろう。そのような記述はいかにして可能なのか？——少なくとも言えることは、フィールドにおける経験そのものから言えば、それを単に記述しただけでは、社会学にはならない。フィールドにおける経験の記述とは、自身の経験を反省的に観察することを通して対象を記述する営みであるのだ。

しかしながら、こうした記述において、記述するのは前述したような「社会学者」であるということに限定されていた。それに対して、社会学は、歴史的に別の社会学者概念も持っている。〈私〉の経験する世界の記述が社会学になる可能性を考えると、この別の社会学者概念においても妥当するか否か検討しなければならない。

この別の社会学者概念とは、エスノメソドロジー (ethnomethodology) が提示してきたものである。すなわち、エスノメソドロジーは、その名の通り、一般の人々 (ethno) が社会において実際にどのような方法 (methodology) を用いているのかを探究するものであった。

ガーフィンケル (Garfinkel, H.) がエスノメソドロジーを創始するにあたって参照したシュッツ (Schutz, A.) の議論から振り返ることにしよう。シュッツは、ウェーバー (Weber,

M.) の理解社会学の哲学的基礎付けを探究する中で、「行為者の主観的観点からみて彼の心のなかで実際になにが生じているのか」を記述することに行き着く。これは、シュッツにおいて、「自然的態度の構成的現象学」の構想となって表れていた。しかしながら、シュッツの試みは、シュッツの議論においては、しばしば自我論的な構成として指摘されてきたところのものであった。それに対して、ガーフィンケルは、「自然的態度の構成的現象学」を社会的な世界において適用することを通して、社会学を試みたものであると位置づけることができる。ここでいう、社会的な世界とは、相互行為場面である。

こうしたエスノメソドロジは、あくまでも「社会学者」の行う「プロの社会学」に対して、一般の人々が、社会的な世界の中で行っている「しろうとの社会学」を志向したものであった。だから、エスノメソドロジストにとって、実際に社会的な世界において社会学を行っている（と観察される）のは、「社会学者」ではなく、一般の人々である。このことは、エスノメソドロジストが、しばしばエスノメソドロジそのものが、社会学であることを否定することとなって現れる⁽¹⁶⁾。

しかしながら、エスノメソドロジにおいては、あくまでも対象者の行為を観察し、行為を意味に結びつけるのは観察者たる社会学者の仕事であるのだ。ガーフィンケルは、次のように言う。

行動に意味を結びつけるのは観察者であって、行動を行っている被観察者ではない。行為を反省において経験するのは観察者である。[Garfinkel, 1952:355]

「フィールドワークの自我論的転回」は、こうした従来のエスノメソドロジに対して、可能なもうひとつのエスノメソドロジの在処を指し示しているのかもしれない⁽¹⁷⁾。従来のエスノメソドロジは、「一般の人々」の社会的な世界における行為（＝社会学）を解釈し説明することによって、「社会学者」を「一般の人々」のほうへと一致させ、自らが「社会学者」であることを消去することによって、「一般の人々」を社会学者に仕立て上げることを可能にしていた。そこでは、「一般の人々」こそがほんとうの社会学者であるという認識によって支えられていた。それに対し、「フィールドワークの自我論的転回」においては、「社会学者」と「一般の人々」とを、別の方法によって一致させている。すなわち、いわば「一般の人々」を「社会学者」の方へ一致させることによって、「社会学者」もまた「一般の人々」であって、そうした生身の人間としての「社会学者」がフィールドにおいて経験（＝社会学）してきたことによって、社会学をするというというあり方である。ここには、「社会学者」がフィールドで経験することは社会学であるし、そして、経験したことを記述したその結果もまた社会学となるという「二重の社会学」が生じている。「フィールドワークの自我論的転回」において、フィールドにおける〈私〉の経験を記述する「社会学者」は、観察者であるとともに、被観察者でもあるからだ。

しかしながら、ここに次のような問題が生じてくる。われわれは、〈私〉とは、もちろん個々の「私」に共通する一般的な普遍的な〈私〉であって、すべての人々を包括する概念として使用してきた。だから、〈私〉は「人びと」と等号で結ぶことができていた。だが、フィールドにおける〈私〉の経験は、具体的にはフィールドワーカーである「この私」の経験にほかならない。〈私〉の経験する世界の記述とは、具体的にはそれぞれの「私」が経

験した世界についての記述となる。そこでは、「人びと」と等号で結ばれるような〈私〉とは異なった、特定の「私」についての記述になるのではないか。では、そうした、特定の「私」の一見「個人的」とも思えるような経験は、いかにして社会学になりうるのか。

5. 社会学の学問的对象は社会ではない

特定の「私」が経験した世界の記述は、いかにして社会学になりうるのか？

そもそも、特定の「私」が経験する世界の記述が、「人びとの社会学」になりうるのは従来からエスノメソドロロジーが行ってきた手法であったともいうことができる。エスノメソドロロジーにおいて、観察者（エスノメソドロジスト）は、行為者が実際に社会的にどのように行為をしているのかを理解する中で、特定の「私」である行為者＝被観察者に同一化する。それに対して、「フィールドワークの自我論的転回」は、そこで行為を「実際に」行っているのは、被観察者たる行為者ではなく、観察者そのものであるとき、この「私」が実際にフィールドにおいてどのように経験したのか、という課題が設定されているのである。

こうしたあり方は、「私」というものの社会性に照準を合わせている。特定の「私」の経験であったとしても、その「私」がフィールドにおいて他者たちと相互行為を行うことを通して、その経験の中には他者性が組み込まれる。そうした経験というものを観察するとき、それはすでに社会的なものが織り込まれているとも言えるのだ。だから、特定の「私」は、そこにおいて普遍的一般的な〈私〉、すなわちすべての「私」に共通することがらとして、その経験を記述することができる。そこでは〈社会〉というものは、フィールドワーカーのフィールドにおける経験の中に見出されるということになる。

こうしたあり方において、私たちが確認することは、社会調査とは、基本的に社会を調査するわけではない、少なくとも、社会を何か実在の対象として捉えるというわけではない、ということである。「社会調査の対象は社会ではない」という言説は、一瞬奇異なものに見えるかもしれないが、実のところ、まったくもって当たり前のことを述べているに過ぎない。社会調査は、社会的な調査（social research）であって、社会についての調査（research on the society）ではない。それと同様に、社会科学も、社会を対象とする科学ではない。社会科学は、社会的な科学（social science）であって、社会についての科学（science of the society）ではないのである。そして、社会調査も社会科学も、社会的なものについての調査（research on the social）、社会的なものについての科学（science of the social）ではないのである。

このことは、社会調査や社会科学が、そして社会学が、社会を対象にしていると素朴に信じて、多くの社会学者たちが行ってきたことが、ときとしての的を得たものではなかったことを指し示すことになる。あるいは、そうした社会学者たちもまた、実際に「社会学をする」ということにおいて、あるいはそうした社会学者たちの優れた仕事においては、そうした次元（社会の実在性の次元）というよりも、しばしば「社会的」ということにおいて行ってきていたとみることもできるかもしれない。

それでもなお、次のような疑問が提示されることがあるだろう。すなわち、「フィールドワークの自我論的転回」によってもたらされたものは、結局のところ「社会学者」である〈私〉の経験の記述であって、オールタナティブなエスノメソドロロジーにはなりえないので

はないかと。

こうした疑問に対して、われわれは今や次のように言うことができるだろう。フィールドワーカー（観察者）は、フィールドにおいて経験する以前に、すでに社会化された存在であって、それは社会のメンバーとして、行為を行っている。だから、「社会学者」においてでさえ、〈社会〉なるものははじめから織り込まれているのであって、そのことに自覚的に組み立てる営為は、必然的に「この私」に限定された記述になるのではなく、すべての〈私〉に共通することがらとなるのである。

こうしたあり方は、社会学における独我論の可能性を切り開くものであるかもしれない⁽¹⁸⁾。「この私」の経験する世界についての記述は、第一義的には社会的なものではないとされてきた。なぜなら、それは特定の私に固有の事柄であって、すべての私に共通することがらではないからである。しかしながら、いまやそのようなことはいえないであろう。この「私」が経験する世界のなかには、まさに社会的なものが含まれるからである。そして、そもそもこの「私」の成り立ちそのもののなかに、社会的なものが含まれているからである。

わたしたちは、反フィールドワークの知、あるいは、「フィールドワークの自我論的転回」の中に、社会学がようやく、フィールドにおける経験を問題にするようになったことを見出すことができるかもしれない。そうした社会学は、フィールドにおいてそうした経験を問題にしてきた精神分析や文化人類学に対して、歴史的に遅れた存在として映ることになるだろう。それとともに、社会学は、これらに続く第三の「反科学」になりうる可能性をもっていることを示すものであるのだ。

フーコー（Foucault, M.）は、近代のエピステーメを検討し、人間諸科学が「人間の終焉」をもたらしていることを論じる一方で、精神分析と文化人類学が、他の人間諸科学とは別の方向性をもったものとして、特権的な位置を占めていることに着目している[Foucault, 1966=1974:395]。フーコーによれば、その原因は、精神分析は無意識的なものの次元に置かれているからであり、文化人類学は歴史性の次元に置かれているからであるという。フーコーは、文化人類学と精神分析と交錯しながら、第三の「反科学」が、人間諸科学に対するもっとも一般的な異議申し立てを形成することになることを予想していた[Foucault, 1966=1974:403]。

われわれが、反フィールドワークの知に見出したのは、フーコーが見逃していた、あるいは、フーコーの生きた時代の社会学にはなかった、社会学の可能性なのかもしれない。社会学は、まさに社会的なものの次元に置かれることによって、「反科学」としての資格をもつことになるのである。

5. おわりに

初発の問いに戻ることにしよう。本論文は、理論と調査の対立的地平はどのようにして無効化されうるのかということであった。それに対して、本論文が反フィールドワークの知に見出したのは、理論と調査の一致によって、この対立的地平を無効化することであった。この立場から言えば、理論というのは、対象／現実を捉えるための道具ではない。現実／対象を捉えるということ自体が、そもそも理論的であるということであり、理論は現実そのものであるのだ。だから、この立場からすれば、調査を離れたところには、いかなる理論も存在しないということになり、ここにおいては、理論／調査の二分法は無効であ

り、それとともにそれぞれには、否定が加えられることになる。「反フィールドワークの知」とは、そうした理論と調査の一致の謂いである。

しかしながら、この一致には、二つの方法がある。一つは、「フィールドワークの自我論的転回」が行ったように、エスノメソドロロジーと同様に、理論を調査の側に一致させることであるだろう。その一方で、もう一つは、「フィールドワークの自我論的転回」が従来からのエスノメソドロロジーと袂を分かち、観察対象を観察者に一致させたように、調査を理論の側に一致させることである。その可能性は、「フィールドワークの自我論的転回」が、社会学の哲学への回帰という要素を含んでいるところに見出すことができた。

社会学の哲学への回帰はまた、社会学というものを、既存の社会学研究のフォローであったり、真似だったりするのではなく、「社会学すること」と位置づけることに繋がっていく一方で、われわれは誰しも（意識せずとも）はじめから社会学をしているということになる。だから、社会学をしようとする者は、「社会学すること」と「社会学であること」において、二重に否定する要素と共に歩むことになる。だから、社会学は、「社会学すること」の努力の結果として、達成されるかもしれないものにすぎない（達成されないかもしれない）。「社会学をする」というのは否定的な経験であり、社会学を達成することは、（そして「社会学すること」も）奇跡であるのだ。

フィールドに出る以前に、そもそもこの世界がフィールドである。社会学をする以前に、社会学をしている。「フィールドワークの自我論的転回」は、このように考えるとき、フィールドワークの特権化から抜け出すことができるだろう。

〈注〉

- (1) この検討は、日本社会学会をはじめとする3学会による2003年に「社会調査士資格認定機構」の設立に実を結び、資格制度の運用が始まった。
- (2) 日本社会学会第74回大会テーマ部会「社会調査の困難——社会学のなかの社会調査」(2001年11月25日、於・一橋大学)、日本社会学史学会第41回大会シンポジウム「社会的現実の多様性と経験的研究の軌跡」(2002年6月30日、於・大妻女子大学)、社会科学基礎論研究会2002年度第2回研究会・シンポジウム「社会調査の知識社会学」(2002年12月21日、於・大正大学)など。
- (3) 特に質的調査を取り上げたものとして、日本都市社会学会第13回大会テーマ部会「都市社会調査における質的方法と量的方法——優劣論争を超えるために」(1995年6月24日、於・江戸川大学)、関東社会学会第47回大会テーマ部会「質的調査研究における『確からしさ』」(1999年6月12日、於・早稲田大学人間科学部)
- (4) 佐藤は、「質的調査」というカテゴリーに対する過剰な期待に対して、慎重かつ懐疑的な立場をとり、このカテゴリーの政治的・党派の利用やイデオロギー効果に自覚を促している[佐藤, 2003:11f]。
- (5) たとえば、日本社会学会の社会学教育委員会では、日本の社会調査教育における質的調査の教育実態を掴むべく調査を行い、その成果を報告書[日本社会学会社会学教育委員会, 2006]にまとめている。
- (6) こうした社会学の実定化は、具体的な事例に則して吟味して記述することが必要であり、ここでは仮説として提示しておくにとどめる。

- (7) 本論文において、このことは後に、社会学者以前の社会学として、「人びとの社会学」を取り出すことになる。
- (8) たとえば「日本社会学会倫理綱領にもとづく研究指針」においても、こうしたことが定められている。
- (9) したがって、フィールドワークの「暴力」に敏感な調査者は、フィールドの中で「暴力」が実効しない＝されないためには、「透明人間」にはなり得ないにもかかわらず「透明人間」にならなければならないことになる。
- (10) もちろん「ラポール」が強調されるのは、対象者との間にコミュニケーション的な信頼を構築することが倫理として要請されるためである。しかしながら、こうした倫理は、フィールドワークにおけるコミュニケーション過程へと自己を投棄し感覚を麻痺させるものになるとともに、フィールドワークを特権化するための規範になってきた。あるいは、コミュニケーション過程に亀裂が生じたときにもまたこの倫理は、そこに「社会的なもの」を見出すことによって、フィールドワークを特権化するための好材料として解釈してしまう。
- (11) こうした実験的民族誌の試みに並行し、それまで客観的事実の報告と見られてきたエスノグラフィーが政治学と詩学の産物であることを明らかにしたのはクリフォードとマーカスの編集による『ライティング・カルチャー』[Clifford & Marcus (eds.), 1986] である。松田は、この書物を、文化人類学の自己反省を「一つの強力な思潮にまで高める契機」[松田, 1996:24] になったと評価する。
- (12) こうした観察者問題、フィールドワーカーの〈私〉の危機は、フーコー (Foucault, M.) が議論 [Foucault, 1975=1977] を行ったベンサムの考案した監獄施設パノプティコンを援用して、次のように表現することができるだろう [周藤, 1997:194]。「パノプティコンの看守は、囚人を自分と同じ人間として扱ってはならない。もし、囚人に〈ひと〉を感じたら、その瞬間から囚人よりも囚人らしい世界の中を生きなければならなくなる」。これは、観察者が対象者を理解しようとしたとき、その対象者の意味世界に転移したとき、必然的に起こる現象なのである。
- (13) 先に触れたように、文化人類学においては、こうした自己解体を行っていく先鋭的なグループが存在した。
- (14) たとえば、文化人類学や社会学を学ぶ学生に対して、教師がこうした命令を下すことはよくあることだろう。
- (15) こうしたあり方は、文化人類学における「実験的民族誌」の試みで言えば、「自伝モード」と呼ばれる記述に相当しているだろう。しかしながら、エスノグラフィーを書く方法を中心に据える人類学に対して、社会学における「フィールドワークの自我論的転回」において試みられているのは、エスノグラフィーを超えた、論文という実践である。ここには、文化人類学と社会学との学問的性質の違いが表出しているように思われる。社会学は文化人類学と比較して相対的に自己省察を理論的に記述する点において、哲学に近似するのである。
- (16) なぜなら、社会学を行っているのはあくまでも一般の人々であって、自らが行っているエスノメソドロジーという試みは、社会学であってはならないからだ。
- (17) 筆者は、こうしたエスノメソドロジーの読みの可能性についてかつて論じている [周藤, 1999]。
- (18) 筆者は、社会学における独我論禁忌の解体、ならびにその可能性の探究について周藤 [2003]

において論じている。

〈文献〉

- Clifford, James & George E. Marcus (eds.) 1986 *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, University of California Press. = 1996 春日直樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子 訳『文化を書く』紀伊國屋書店.
- Garfinkel, Harold 1952 *Perception of the Other*, Ph. D. Dissertation at Harvard University.
- Foucault, Michel 1966 *Les mots et les choses: une archéologie des science humaines*, Gallimard. = 1974 渡辺一民・佐々木明 訳『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社.
- 1975 *Surveiller et punir: naissance de la prison*, Gallimard. = 1977 田村俣 訳『監獄の誕生』新潮社.
- 藤山 直樹 1997 『『私』の危機としての転移／逆転移』, 氏原寛・成田善弘 編『転移／逆転移——臨床の現場から』人文書院, 31-48.
- 井出 裕久 2003 「社会調査論のパラダイム転換と社会調査のリアリティ——社会調査の知識社会学へ向けて」『年報社会科学基礎論研究』2: 78-95.
- 松田 素二 1996 『『人類学の危機』と戦略的リアリズムの可能性』『社会人類学年報』22:23-48. 日本社会学会社会学教育委員会 2006 『『質的な分析の方法に関する科目』の授業内容に関する調査報告書』日本社会学会社会学教育委員会.
- 佐藤 健二 2003 「社会調査のイデオロギーとテクノロジー——認識を生産するプロセスの認識」『年報社会科学基礎論研究』2:8-25.
- Searles, Harold F. 1979 *Countertransference and Related Subjects: Selected Papers*, International University Press. = 1991/95/96 松本雅彦・横山博・田原明夫ほか訳『逆転移——分裂病精神療法論集』1～3, みすず書房.
- 盛山 和夫 2004 『社会調査法入門』有斐閣.
- 周藤 真也 1997 「20 世紀精神医学の経験——分裂病と精神療法をめぐる——」『現代社会理論研究』7:187-202.
- 1999 「エスノメソドロジーと人びとの社会学」『年報筑波社会学』11:63-85.
- 2003 「アンチ・アンチ・ソリプシズム——A・シュツツと独我論をめぐる関係性から——」『年報社会学論集』16:250-260.
- Wittgenstein, Ludwig 1922 *Taractatus logico-philosophicus*, Routledge and Kegan Paul. = 1975 奥雅博 訳『論理哲学論考』大修館書店.
- 好井裕明・桜井厚 編 2000 『フィールドワークの経験』せりか書房.
- 好井裕明・山田富秋 編 2002 『実践のフィールドワーク』せりか書房.
- 好井裕明・三浦耕吉郎 編 2004 『社会学的フィールドワーク』世界思想社.

※本論文は、2007 年 7 月 7 日に開催された第 19 回筑波社会学会大会における一般研究報告をもとに再構成したものである。

(すとう しんや／早稲田大学社会科学総合学術院准教授)

Knowledge of Fieldwork / Knowledge of Anti-Fieldwork:

SUTO Shinya
Waseda University

How can we invalidate the contradictory horizon between theory and investigation? In this paper, we find out the invalidation possibility in the negative element of so-called fieldwork itself (this is called “knowledge of anti-fieldwork”). Origin of “knowledge of anti-fieldwork” is that living in this world has a value of fieldwork. This means that not only sociology has the thinking nature of philosophy, but also “egologicistic turn of fieldwork” indicates the possibility that describing of empirical world become a sociology. This logical type indicate the possibility of another “people’s sociology” against the former ethnomethodology which constitute investigator’s observation to the people’s methodology living in the world. Thus, the way that sociology becomes a social science is opened through liberating from the object of society with social research.

Key words: theory, social research, fieldwork, social science